



TITLE:

ドレツシャアの「農業経済學と農村社會學」

AUTHOR(S):

山崎, 武雄

CITATION:

山崎, 武雄. ドレツシャアの「農業経済學と農村社會學」. 經濟論叢
1939, 49(3): 526-530

ISSUE DATE:

1939-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131291>

RIGHT:

經濟叢論 每月一日發行
第四十九卷第三號 昭和十四年九月一日發行
大正四年六月二十一日第三號郵便物認可

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第三號

昭和十四年九月

(禁轉載)

論叢

新利子論序說

文學博士 高田保馬

英國及び獨逸の所得稅

經濟學博士 汐見三郎

時論

現代日本の革新

經濟學博士 石川興二

世界新秩序の建設

經濟學博士 柴田敬

研究

史記平準書に見はれたる經濟思想

經濟學士 穗積文雄

府縣財政制度の成立

經濟學士 藤田武夫

經營比較の形態について

經濟學士 岡部利良

說苑

原料封鎖に於ける獨逸の經驗

經濟學士 大塚一朗

ドイツの農業經濟學と農村社會學

經濟學士 山崎武雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

ドレツシヤアの「農業

經濟學と農村社會學」

山崎 武雄

本稿は獨逸の農業經濟學者レオ・ドレツシヤアの「農業經濟學と農村社會學」の紹介である。本書は小著ではあるが農業社會科學に於ける獨、米兩學派の興味深き學說史的比較研究である。併し茲では其の前篇たる農業經濟學の部分を忠實に紹介するに止める。

一

本書に於ける著者の意圖は、具體的には獨逸の所謂「農業政策」の教義領域及び研究領域と、これに相當するアングロサクソン諸國（特に米國）の學說とを比較するにあるが、其の際外面的なる差異よりも寧ろその背後にある精神的活動、精神的流れをより、重要視してゐる。

先づ米國の農業經濟學は僅か三・四十年の間に驚くべき獨自の發展を遂げたが、最初は純粹に經營學的に

生産費問題を中心として展開せられた。ヘイ、スピルマン、ワレン等を代表者とする各州立大學での研究が盛にして、所謂記帳又は聴取式調査方法(survey method)が行はれたが、この調査研究は一般經濟學的竝に農業技術的觀點に立つよりも、寧ろ農場經營學的觀點を中心として、所得、利潤、資本投下、經營組織等の研究に限定せられた。然るに一八九〇年代の農業恐慌を契機として、農業を社會經濟學的に研究せんとする、テイラー、カーバーを中心とする一學派が現はれ、農業經濟學(Agricultural Economics)は經濟學の一部門として確認されるに至つた。茲に於て農業經營學と農業經濟學との鋭い對立が生じ、後者は農業販賣論、農業價格論、土地經濟學をも包攝するに至り、前者の獨自の地位は喪失した。併し農業省農業經濟局(Bureau of Agricultural Economics)の斡旋により兩者は統一せられて、農業經濟學の概念は擴大し、更に農業史及び農業地理學をも其の一部門として採り入れた。かゝる廣義の米國學派たる農業經濟學に於ては「經濟的目的定立」が強

*) Leo Drescher: Agralökonomik und Agralzoziologie Über die Aufgaben und Grenzen der Agralwissenschaften, 1937.

調され、農業經營の最も重要な經濟問題は、生産要素たる土地・勞働及び資本を如何にすれば最も效果的に組合し得るかといふことであり、古典學派及び新古典學派の抽象的研究方法の結果に基いて研究對象を經濟問題にのみ限定した。これ米國學派の特質にして、この學派は問題を經濟部面にのみ限定し、經濟外的要素は全く之を無視し、従つて農業政策については論じない。經濟外的問題は經濟的福祉によつて容易に解決し得ると確信したのである。

次いで著者は獨逸に於ける農業經濟學の發達を略述する。斯學は獨逸に於ても先づ經營學として發達し、其の端初は遠く中世にまで溯るが、之を科學的に基礎付けたのはアルブレヒト・テアアであつて、彼は「農業は一の營業にして貨幣獲得を主要目的とする。」と考へ、彼の以後チューネン、シュヴェルツ、ゴルツ、エーレボー等優秀なる學者が輩出した。他方、十九世紀初頭、既に官房學派たるヤコブ、ゾーデン後にはロツツ、ラウ等によつて「農業政策」が樹立され、歴史學派

ドレツシヤアの「農業經濟學と農村社會學」

の強き影響の下に、ロツシヤ、プウヘンベルガー等を経て、マックス、ゼーリングに發展した。農業政策的研究は農業及び農業組織を廣く歴史的基礎に基いてなすを特徴とし、更に農業の社會的側面（勞働者、農民の問題等）をも考察するが、かゝる理論的研究も國家の政策の基準樹立の爲にのみなさるべきものである。こゝでは政治が優先する。「農業政策」こそ農業經營より遙に優位を占め、獨逸に於ける本質的問題をなす。

二

兩國に於ける斯くも異なる學的發展は、然し乍ら、社會科學者の恣意や特性の差異よりも、他の社會的、地理的諸關係及び哲學的傳統の差異によつて説明される。米國に於ては廣大なる土地及び無限の富源が社會的壓迫を緩和する安全瓣の作用をなし、最初の殖民時代を除けば個人的不自由も、何等かの土地、生産地若くば雇傭關係への拘束もなく、また異なる職業團體間の利害の衝突もなかつた。而して自然の富、企業家精神並に廣大なる市場の相互作用によつて一世代の間に

驚くべき經濟的奇蹟を創造した。かくて古典學派の利己心が指導原理として取入れられ、何等政策の必要を見なかつたのである。尙ほ土地の廣大は、同質、多量の材料の蒐集を可能ならしめ、他面社會的同一性と相俟つて、統計的研究方法を重視せしめるに至つた。之に反し獨逸に於ては經濟的發展性の薄弱と物質的財の缺乏とにより經濟部面への國家的干渉を必然ならしめた。次に哲學的傳統について考ふるに、アメリカ人は天性、實在論的・合理的資質を有し、經濟學に於ける哲學的思想を蔑視する。即ち自然科學的方法のみを純粹科學の標識とし、精神科學を輕視し、理念を宗教的嗜好と見做す。獨逸に於ては傳統、政治等の觀念論的構造及び測定し得ざる諸要素の經濟事象に及す作用を重視する。かくして研究對象の異なる把握よりして、必然的に異なる方法的處置が生ずる。

三

米國學派の方法論的基礎付けは、英人カール、ピアソンによつて遂行された。彼は科學の概念を數學的

自然科學的立場に限定する。彼は原因、結果でなく、關係や連續を語り、因果法則を修正し蓋然性の程度測定を問題とする。此の方法は、事實の分類、關係と歸結との證明、普遍妥當的な法則の定立（勿論蓋然性に於ける）である。彼は言ふ「總ゆる科學の共通性は其の方法にのみ存し、對象には存しない」と。此の方法論的一元論が米國學派の特質である。然し乍ら數學的・自然科學的研究方法及び目的の社會的經濟的事象への導入には特別の證明を要する筈である。

さて米國學派の研究方法は具體的には左の五に分たれる。

- (1) 類推方法 (Analogy)
- (2) 事例研究方法 (Case Method)
- (3) 實驗的方法 (Experiment)
- (4) 簡略統計的方法 (Informal statistical Method)
- (5) 統計的方法 (Statistical Method)

統計的方法が純粹科學に最も近い方法として最重要視される。それは大量現象の整理、蒐集、分析及び方式的・數的表現に存し、適用の前提としては同一なる或

は類似的なる事例の充分多數に存することを必要とする。この遂行には数理統計學を用ひ、究極目的は經濟生活の安定化にある。他の諸方法は斯くの如き高き目的を含まず、現象の敘述、分類、認識に役立つ。簡略統計的方法は觀察事例の少數なる場合に用ひられ、此の方法の獨立性は薄弱である。實驗的方法は研究さるべき要素以外の總ての要素が不變であるとの前提の下に於てのみ統計的方法に次ぐ確實な方法である。この前提は社會科學に於ては充され難く、従つてこの方法の價值は、大量の現象過程について同一結果を示すことが證明されない限り極めて小である。技術的農業經濟的問題の領域に於ては實驗的方法は特に適當である。事例研究方法は統計的方法と結合すれば極めて有力となる。併し個々の事例が問題とする事象の代表的のものであるとの要請は常に必ずしも満たされない。此所にこの方法の利用限界がある。最後に類推方法は寧ろ哲學、心理學及び歴史の方法に屬し、米國學派は之を蔑視したが、演繹方法と結合し一方法たりうる。謂はば一の比較術であるが、本質的には形而上學的性質を有することを根本的な缺陷とする。次に著者は歴

史的方法及び地理的方法の二方法を附加する。

獨逸に於ては方法論は極めて重要な一理論である。著者が此所で問題とする處のものは、法則科學の研究方法を精神的・經濟的・社會的生活に移しうるか否かといふことである。先づ法則定立的科學が全く自然科學と同一視されざることを強調する。經濟學に於ては特別の擬制、即ち孤立化され一般化された抽象を前提し、それより結論を演繹する。併し經驗的現實よりの遊離は、かくて得られた法則の普遍妥當性を制限する。經濟法則は自然科學的法則より區別され、一の「傾向律」となる。自然認識とは異り、人間生活の社會的領域に於ては、人間の意志が働き、従つて人間の經濟生活は因果的に決定された結果又は一の自然要素としては把握されぬ。尙ほ數學的研究方法の援用に對しても擬制の限界は妥當する。さて我々が社會科學に於て基礎付けんとする法則性は總て明に擬制の性格を有し、所謂沒價值性も方法論の領域に限定さるべきである。併し茲に重要なことは、可視的な現象の背後に存する原理を「理解」せねばならぬことである。此のことは獨逸の農業政策に特に重要である。蓋し純粹經濟的契

機や數量化しうる現象と共に、法律・農民心理學・世界觀・政策・等をも問題とするからである。最後に著者は科學の課題が單に擬制的敘述に終るべきでなく現實科學(Wirklichkeitswissenschaft)たるべしとの實踐的立場を主張する。而して宣傳及び政策的變化に墮せざるために、二つの要請をあげる。即ち抽象的認識の普遍妥當性を永遠なる法則とせざる事、價值判斷の構成を認識批判的に行ふ事これである。農業經濟は單に悟性や研究によりては把握されぬ。之と密接な關係を有する他の諸領域の理解を必要とする。

四

最後に農業經濟學の研究問題が論ぜられる。著者は之を大體次の如く分類する。

- (1) 農業經營學。これは農業政策の規準となり理論的にも經營學的認識より出發すべきであるが、一般經濟學の一部門たる農業經濟學に取つて重要な問題を取扱ふ。生産地域、販賣地域の分割、世界的團體的競争、生産費、經營規模、經營集約度問題、小作制等の諸問題が考究される。
- (2) 農產物販賣論。こゝでは市場構造、市場地域、農產物消

費を支配する諸要素の研究がなされる。

- (3) 農業協同組合。共同社會の思想に基き、教育的職能的(ständisch)内容を有す。生産統制・販賣統制・中小金融等が重要である。

- (4) 農產物價格研究。需給の分析、價格の影響、農業循環、收益、價值論を取扱ふ。

- (5) 農業金融組織。農業の資本主義化に伴ふ農業と工業との對立、資本の農業への影響及び農業に於ける資本調達を中心問題とする。

- (6) 農業制度と農業史。兩者の相互依存關係の究明が重要である。尙ほ農業地理學は除外される。

- (7) 土地經濟學。土地私有權問題、實踐的には土地利用の經濟政策的標準確立、小作問題、移民政策をも問題とし自然科學とも結合する。

- (8) 農業政策。最近米國に於ても漸く問題となり、他の經濟政策と共に農業經濟的計畫として樹立されねばならぬ。

以上私は著者の論述を辿つて彼の意圖せる農業經濟學の諸問題竝に研究方法を考察した。彼の獨米兩學派を綜合せんとする企圖は充分精練されない憾があり、且つ論旨の充分展開されない部門(特に方法論)も残つてはゐるが、大體に於て成功し、極めて有意義な勞作と言ひうるであらう。